

校内別室での支援体制について

不登校生徒の状況

対象生徒は、授業や教室にいることに不安を感じ、しばらく学校に登校できない期間があった。別室を開設してからは、定期的に別室登校することができるようになり、学校行事等にも参加できるようになった。

具体的な取組

○別室の環境整備と見守り

生徒が通いやすい場所に設置した別室は、室内を広く使えるように整備し、別室指導支援員が見守りを行っている。

給食や学習の際は、別室指導支援員が、別室の友人と関わる機会を設けたり、生徒の希望や悩み等を聞いたりするなど、生徒の意思を尊重した対応を行っている。

○登校の支援

利用する生徒・保護者が希望する場合は、別室指導支援員が生徒の自宅まで迎えに行き、

一緒に登校するなどの登校支援を行っている。



○学習等のサポート

別室では、学習や定期試験が受けられるよう、別室指導支援員が、別室受験の見守りを行っている。生徒が登校した時間に合わせ、試験時間等の対応をしている。また、別室指導支援員は、生徒の意思を尊重し、一日の予定やオンラインによる授業参加等の相談に乗っている。

○教職員やSCとの連携

担任だけでなく、生徒の学年の教員等が、別室で生徒に声かけし、個別の学習支援を行っている。下校時には、生徒が今日したことや思ったことなどを記入したファイルを別室指導支援員が担任へ渡し、生徒と担任やSCなどつながるきっかけづくりをしている。

成果

当該生徒は登校できない期間があったが、別室を開設し居場所づくりをしたことで登校できる日が増えた。

様々な立場の教職員が、生徒と関わることで、生徒の課題解決に向けた支援がしやすくなった。

課題

別室を利用する生徒が、増えているため、教室環境や使用のルールの改善について共通理解を進め、更なる充実が必要である。

安心して利用できる校内別室について

不登校生徒の状況

対象生徒は、過去の体験が原因で夜眠ることができず昼夜逆転生活になった。中学校1年生の途中から学校に行きたくても行けない日が続いた。家庭環境があまりよくなく、親子関係に課題が見られる。登校支援を行い、校内別室を利用しながら少しずつ登校ができるようになった。現在は校内別室に登校しながら、登校を継続している。

具体的な取組

○多くの教職員が見守る体制

校内別室指導支援員は、当該生徒の気持ちを全面的に受け入れるよう心がけた。担任と対話の時間が取れないときには、代わりに当該生徒の気持ちに寄り添って話を聞いた。当該生徒が学校で安心できる居場所ができ、信頼できる拠職員がいると実感できるように対応した。

○登校支援

当該生徒は夜眠れず朝起きられないことが続いている。保護者は朝早く仕事に出るため、担任や校内別室指導支援員が電話を入れた。場合によっては家庭と子どもの支援員やSSWが家へ行き、登校支援を行った。現在は卒業後の自立に向けて、朝起きられるように練習を始めた。

○登校への意欲を継続

当該生徒は絵を描くことが好きで、得意としている。校内別室の黒板全体を使って絵を描き進めている。教員が必要な色チョークを用意し、卒業制作にしようかという提案をした。校内別室を利用する生徒と相談しながら一緒に絵を描くこともある。

○校内別室の環境整備

校内別室を安心して過ごせる場になるよう環境を整えた。気分が落ち着くように植物を置いたり、座席の工夫を行ったりした。休み時間に手先を動かしリフレッシュできるようなものも置いた。



成果

別室指導開始後には別室を利用し、登校が継続できるようになった。お昼前後に起床し、現在はほとんど欠席せずに毎日登校を継続できるようになった。校内別室指導支援員との関係性が構築でき、安心して自分の気持ちを話せるようになった。

課題

校内別室で取り組む課題を自分で設定することができなかった。取り組むべきことを教員も準備をし、当該生徒自身で決められるようにする。

校内別室の活用

不登校児童の状況

対象児童は、小学校第2学年であり、「学校に行きたい」、「教室に入りたい」と思っているものの、集団や勉強に対する不安など、様々な事情から教室に入れない。一日を通して学校にすることが困難で、保護者が付き添って登校している。



具体的な取組

○セカンドルームとしての場所を確保

登校への不安や教室での集団で過ごすことに難しさを感じた時に、別室が安心して利用できる場所であることを当該児童に伝えている。校内別室指導支援員が個々の児童の不安や悩みに寄り添い、利用する児童のペースで支援している。

○カウンセリングを生かした支援

校内別室指導支援員が当該児童から話を聞き、個々の児童が抱える不安や悩みを把握し、担任・生活指導主任・管理職等と共有している。カウンセリング資料を基に、組織として当該児童への関わり方や支援方法を検討し、対応している。

○教室復帰に向けての支援

校内別室指導支援員が常に見守り、校内別室と教室を自由に行き来できる環境を整えた。当該児童の気持ちに寄り添い、教室復帰に向けた支援を続けている。

○オンライン授業の活用

校内別室を利用し、オンライン形式での授業に参加できるようにしている。当該児童が学習への不安を感じている国語や算数は、オンラインで参加し、校内別室指導支援員がサポートを行っている。体育や音楽などは、学級で一緒に参加するなど、当該児童に合わせた対応を行っている。

成果

- ・教室復帰の場として、児童の不安を受け止め、個に合わせた柔軟な対応ができた。
- ・校内別室指導支援員が把握した情報を担任と共有することで、担任が当該児童・保護者への的確な支援を行うことができた。

課題

- ・利用児童が多い日の一人一人に対しての人的配置・スペースの確保が必要である。

校内別室で安心できる居場所の提供

不登校生徒の状況

対象生徒は、言葉の行間を理解することが苦手なため、級友とのトラブルがある。中学校1年生の3学期に起こったトラブルが原因で教室に入れなくなり、現在は校内別室を利用している。自分の思いを分かってもらえないという気持ちが強いこともある。

具体的な取組

○安心して過ごせる環境づくり
通常の入り口以外に、普段使用していない門から登校することで他の生徒に会わずに登下校できるようにしている。また、生徒ごとに心地よい他人との距離感が違うので、校内別室では座席を固定せず生徒に自由に席を移動、配置できるようにしている。

○心に寄り添った対話
当該生徒は自分の思いを分かってもらえないという気持ちが強いので、支援員や巡回教員が傾聴を心がけ当該生徒の心に寄り添うようにした。その結果、自分自身の改善点を素直に受け入れられるようになった。また、SCとの定期的な面談も実施している。

○不登校生徒や保護者へ丁寧な対応
生徒の困り感を把握しながら支援した。また、担任と不登校対応巡回教員で相談しながら、定期的に保護者に電話連絡をして、校内別室で頑張っている様子などを伝え、親子のコミュニケーションのきっかけになるようにした。

○校内別室による支援
生徒たちが教科担当からの課題を支援員と確認して計画的に取り組めるようにした。また、学習意欲が高まるように、支援員と一緒に調べたり学んだりするようにした。不登校対応巡回教員の巡回時には学習支援を行った。



成果

今までは親子間で学校についての話をほとんどしなかったが、学校での出来事を話すようになりコミュニケーションが増えた。また、教室でみんなと一緒に過ごしたいという気持ちをもつようになった。

課題

教室復帰への希望があるが不安も強いので、当該生徒が、復帰後に安心して過ごせるように、支援体制を整える必要がある。

長期休み明けなど登校のリズムが整わず集団参加が難しい児童に対する支援について

不登校児童の状況

対象児童は、小学5年生である。4年生までは学年の切り替わりなど、不登校になることはあったが、しばらくすると教室で過ごすことができていた。5年生になり、同じような状態であったが徐々に教室から足が遠のき、別室には登校するものの5月の連休や夏休み明けなど1週間ほど登校を渋るようになった。授業や行事参加などには抵抗感が強い。

具体的な取組

○見通しをもった支援

登校時に担任とスケジュールの確認をし、一日の過ごし方を一緒に考えた。

学習は分からないところできじけないように、別室指導支援員が隣についてフォローしながら学習した。



○支援員による気持ちに寄り添った支援

どこまで頑張るか様子を見ながら、「あと少しだからやってみよう」、「今日これだけは出してみたら」などの声かけはせずに、当該児童の意思を尊重した。

「やってみたい」という気持ちを大事にし、イラストや工作など当該児童が興味を示したことに一緒に取り組んだ。

○友達とのつながり

当該児童が描いた作品や制作物を支援員が見て感想を伝えるとともに、他の友達にも見てもらい自信につながるように支援した。

別室での友達との関わりを楽しみにしており、登校のモチベーションにもなって、安心して過ごせるようサポートを行っている。

○教室との連携

クラスで取り組むことには極力参加できるように支援した。

体育や音楽の授業に参加する場合、スムーズに集団に入れるように支援した。

授業をオンラインでつなぎ、別室で授業を受けられるようにした。

成果

長期休み明けなどを挟んでも徐々にリズムができて、別室に登校できるようになっている。

自身についての出来事や、気持ちを別室指導支援員に伝えることが多くなり、表情も明るく過ごせている。

課題

保護者の思いは教室復帰であり、当該児童の気持ちとの乖離が見られるため、互いに納得した今後の目標設定が課題である。

自分のペースで自分の好きなことを深めたい児童への支援について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校 6 年生であり、4 年生から不登校である。教育支援センターに通ったこともある。スケジュールどおりに生活することにストレスを感じやすく、別室登校することになった。別室登校中に、教室に行くこともある。

具体的な取組

○別室での支援

当該児童の居場所となるように、別室が取り組みたいことをできる場になっている。

自分で作ったプログラミングについて、感想を求めることがあり、一緒に画面を見たり、解説してもらおうなどして当該児童の取組を認めた。

○気持ちに寄り添った支援

別室は教室と使い分け、リラックスできる場にした。

友達との関わりの中で嫌な気持ちになることもあるため、別室指導支援員が表情だけで楽しんでいるなどと判断しないよう気を配った。

○家庭との連携

家庭において、行事参加などを目標に登校を促している。そのため、当該児童の頑張ろうという気持ちを尊重し、別室に来たときは話をよく聞くようにした。



○教室との連携

つらいときは別室に行くという当該児童のペースに合わせ、別室では当該児童が取り組みたいことを支援した。

クラス活動など必要なときには、友達が呼びに来るようにしてもらい教室に向かいやすくした。

成果

宿泊行事や運動発表会などに向けて登校し、教室で授業を受けることができた。

疲れたときなどには別室を利用し、自分のペースで登校できるようになった。

課題

当該児童の登校リズムをつくっていくこと

教室に不安を感じる児童への別室支援について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校 4 年生であり、3 年生 3 学期から別室登校している。校内別室が設置されると教室には入れないが、毎日、別室登校している。また、社会科見学や運動発表会などの行事の際には、在籍学級に入り一緒に行動することができる。

具体的な取組

○別室での支援

校内別室指導支援員が、当該児童の隣で説明しながら課題に取り組むよう支援した。

当該児童は、イラストを描くことが得意で自信をもっているため、支援員も認めていることを言葉で多く伝えるようにした。

○友達との関わり

得意なイラストで友達に描き方を教える場面などが見られるようになり、自分の行動で他の友達の役に立っていることをフィードバックし、自己肯定感の向上を支援した。



○家庭との連携

下校後の出来事や様子など、送迎時に保護者から話を聞き、共有を行っている。また、別室で活動する中で、友達との関わりなど気になったことがある場合は、保護者に伝えている。

○教室との連携

給食を教室まで取りに行けないため、クラスの仲のよい友達に教室の前で受け渡すよう対応している。

授業は、別室からオンライン参加できるようにしている。

成果

- ・笑顔で別室登校し、活動内容を自己決定して取り組んでいる。
- ・運動発表会の練習では集団に入ることができた。
- ・苦手な学習にも少しずつ取り組んでいる。

課題

- ・別室における学習支援
- ・教職員への安心感を高めること

はっきりした理由がなく教室で授業を受けられない児童への支援について

不登校児童の状況

対象児童は、5年生のときに転入した小学6年生である。前籍校でも教室に入れなくなっていたが、転入後も教室には入らず、別室登校している。体調が良ければ毎日登校しており、クラスでの話合いなどにも参加することができる。夏には宿泊学習にも参加した。

具体的な取組

○別室での支援

別室では、自分で課題を決定し、自分のペースで取り組むことができる。そのため、支援員は、当該児童が興味をもっていることに一緒に取り組みながら支援をしている。

○興味・関心を基にした支援

当該児童は、興味・関心を基に、様々な活動に取り組めるため、別室を利用する他の児童も一緒に楽しく過ごせるように支援した。



○気持ちに寄り添った対応

当該児童は、必要があればクラスの活動に参加でき、給食も取りに行っている。そのため、別室は、安心して過ごせる場になるよう支援した。

当該児童の好きなことを、別室を利用する他の児童に伝えたり見せたりする機会を設けた。

○教室との連携

クラスの友達が、当該児童を呼びに来るようにして、教室に向かいやすくした。宿泊学習では、事前学習からクラスに入るように支援した。

成果

- ・別室に安定して登校することができる。
- ・行事等、クラスでの活動にも参加ことができ、クラスの友達ともつながっている。

課題

- ・卒業後に向けて、集団参加できるようすること
- ・自分の気持ちを伝えられるようになること

校内別室における支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生の 2 学期から欠席が目立つようになり、2 年生では精神的要因で入院加療をしていた。医療機関にて自閉症スペクトラム症との診断が出ている。3 年生からは毎日数時間登校するようになり、修学旅行以降は朝から登校して別室で一日過ごしている。

具体的な取組

○タブレット端末の活用

タブレット端末を活用して別室と教室をつなぐオンライン授業を時間割に沿って行い、必要に応じてカメラの移動や授業プリントの配布を行った。また、当該生徒が欠席していた期間の学習内容について、支援員が生徒の希望する教科の学習支援を行った。



○コミュニケーショントレーニング

当該生徒の家庭での出来事などを聴き取って自分の言葉で表現させたり、気の許せる友人と一緒に給食を食べさせたりするなど、会話の機会を作ってコミュニケーショントレーニングを行った。

○集会への付き添い

集団に入ることにに対する不安を解消するため、集会等に付き添った。これにより体育館や校庭など広い空間での活動に参加するようになり、体育の授業や進路講演会、救急救命講習を受けることができるようになった。また、放課後に班活動の作業を友人と一緒に教室で行うことができた。



○行事への参加

行事への参加を促して当該生徒に帰属意識をもてるようにした。これにより体育祭は校庭で参観し、学年の集合写真撮影にも参加して一緒に写ることができた。また、そのような取組を重ねたことで修学旅行にも参加し、友人と一緒に班行動を行うことができた。

成果

不安や体調不良から全く登校できていなかった生徒が別室支援開始後に登校して学習することができた事例が 2 件、人間関係でトラブルになり教室に長期入れなかった生徒が別室支援により教室復帰を果たした事例が 3 件、生徒間のトラブルで一時的に教室に入れなかった生徒が別室支援で落ち着きを取り戻した事例が 20 件あった。

課題

現在別室を利用している生徒も不安や体調不良から教室に入ることができずにいる。また、現在 12 人の生徒が不登校状態のため、別室支援の利用を促していく。